



新語形成に用いられる英語由来接尾辞と接尾辞を持つ外来語のアクセント（西光義弘名誉教授追悼号）

永富，央章

(Citation)

神戸言語学論叢, 12:117-130

(Issue Date)

2020-03-26

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012200>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012201>



新語形成に用いられる英語由来接尾辞と 接尾辞を持つ外来語のアクセント¹

永富 央章

神戸大学大学院

1. はじめに

本論文の目的は、日本語で新語を形成する際に用いられる英語由来接尾辞について、それらの接尾辞を持つ外来語のアクセントは外来語全体と比較してもより高い割合で外来語アクセント規則に従うことを指摘することにある。日本語において、形態素とアクセントとの関係は非常に深く、接尾辞によっても様々なアクセント型が観察されることが知られている (佐藤 1989a)。本稿では、これまであまり多くの先行研究で音韻的な分析のなされてこなかった、新語形成に用いられる英語由来接尾辞と外来語のアクセントについて分析を行う。これによって、日本語における語形成とアクセントに関する研究に新たな知見を提供することを目指す。

英語由来の接尾辞が日本語の造語に用いられることについては、いくつかの先行研究ですでに指摘がある。本稿では、まずそれらの先行研究に挙げられた接尾辞の中から、複数の先行研究で造語力があると言われているものを強い造語力を持つ接尾辞として認め、そのような接尾辞は数種類に限られることを指摘する。その上で、語形成に用いられるほどに日本語に取り込まれたそれらの接尾辞を持つ外来語は外来語全体の割合から見ても、また他の接尾辞を持つ語と比較しても、日本語のアクセント規則により強く従うことを示し、英語由来接尾辞の造語力と外来語のアクセントとの関わりについて論じる。

1.1. 英語由来接尾辞と新語形成

基本的に外来語は、それ以上小さな単位に分解できないユニットとして借用され、原語の内部構造は失われると言われている (Haspelmath 2009)。しかしながら、実際にはいくつかの言語で語よりも小さい単位での借用の例が報告されている。例えば、Tadmor (2009) の記述によれば、インドネシア語ではオランダ語/英語由来の *non-* や *super-*, *ekstra-* といった拘束形態素が擬似接辞 (pseudo-affixes) として借用されており、(1) のように語形成に使用される。

(1) *non pemerintah* “nongovernmental”, *ekstra ketat* “extremely strict”, *super murah* “super-cheap”

通常の接辞とは異なり、これらの疑似接辞は、上記の例の通り基本的には接辞と語基が分割された形で表記される。また、Tadmor (2009) にはこの他にもラテン語に由来する接尾辞で

ある-(is)asi, -itas (それぞれ意味的には英語の-(iz)ation, -ityに対応する要素) が生産的に用いられることが紹介されている。前者はもともとオランダ語で-atie, -isatieという語尾を持つ語がインドネシア語に-asi, -isasiという語尾形で借用されたものである(e.g. proclamatie “proclamation” → proklamasi)。のちに英語の-(iz)ationという接尾辞を持つ語も同じ形で借用されるようになり、これが接尾辞そのものとして定着したとされる。また後者は、もともとはオランダ語由来の外来語に多く見られた-itet, -iteitという語尾が、オランダからの独立後に「オランダ的すぎる」とされ、ラテン語の-itasに置き換えられたものだという。これら-(is)asi, -itasのようなラテン語由来接尾辞は (1) とは異なり、通常の接尾辞と同様分割されずに表記される (e.g. koneksi “connectivity”)。また、多くの場合は語基が外来語に限られるという点でも、(1) に挙げられた接辞とは異なった性質を持つ ((1) の語基は全て非借用語である)。²

こうした接辞の借用は日本語においても行われており、英語由来の接尾辞が新語形成に用いられるという指摘がある。日本語の新語形成に関する研究は数多く、その造語法や用法などについて、多様な研究が行われている。言語学的な分析を示したものには窪菌 (2002)、桑本 (2010) などがあり、造語法や造語力に関する記述は米川 (1989) や米川 (1992) などに詳しい。これらの研究では合成、派生、省略など様々な造語法が紹介されており、米川 (1989) では、たとえば派生の例として「不」や「無」のような接頭辞を用いた新語を挙げている。このような漢語形態素の造語力は非常に強いが、ここでは漢語形態素のみならず、外来語の接辞を用いた語形成も紹介されている。米川 (1989) は接頭辞の例としては「アンチ」「ノー」「ノン」「セミ」「ネオ」「ウルトラ」、接尾辞の例としては「イズム」「イスト」「ジー」などがよく使われたと述べており、また米川 (1992) には、「ラー (-er)」や「チック」「フル」「レス」などの接尾辞が造語成分の例として挙げられている。米川 (1992) に記載された、これらの接尾辞を用いて作られた新語の例を以下に全て示す。

- (2) ジェアラー (JRを利用する人)、シキラー (物事をすぐ仕切ろうとする人)、かっぺチック (田舎っぺ風)、おかまチック、ポルノチック、メルヘンチック、漫画チック、アンアンチック、羞恥フル、羞恥レス、元気レス、根拠レス

さらに、石野 (1992) も英語由来の接尾辞を用いて作られた新語として、(3) のようなものを挙げている。

- (3) アルバイター、おとめチック、がんばリズム、にやリスト、キャッシング、スキンシップ、ファンタジック、サイノロジー

このように、複数の研究に英語由来接尾辞を用いた語形成についての記述があり、いくつかの接尾辞が日本語の新語形成において造語成分として用いられうるということが指摘され

ている。しかしながら、こうした研究の多くは、用法や発生の要因、造語法について記述や分析を行ったものであり、これらの接尾辞の音韻的な面に関わる研究はあまり多くない。(2) や (3) のような接尾辞について音韻的な分析を扱った先行研究としては、先に挙げた桑本 (2010) に加えTanaka (2011) が存在し、どちらも英語に由来する接尾辞を用いた語形成について分析を行っている。特にTanaka (2011) は音韻的な点として、語形成における形態素境界での分節音の削除・挿入に一定の規則性があることや、いくつかの接尾辞が特定のアクセント型を持っていることを指摘している。新語のアクセントについて分析を行っているという点でも非常に興味深い研究である。ただし、接尾辞とアクセントの関係について、平板型の生起に関しては考察が示されているものの、その他のアクセント型についてはあまり触れられていない。(2) や (3) に見るように、特定の接尾辞が語種の枠を超えた語形成に用いられうるということは、これらの接尾辞は日本語の語彙に深く溶け込んでいるということであると考えられる。もしそうであれば、平板型アクセントの生起以外にも日本語に深く馴染んでいることを示すような音韻的特徴を示すことはないのだろうか。

1.2. 外来語のアクセントと原語の接尾辞

この節では外来語のアクセントと接尾辞に関する先行研究について議論するが、その前に日本語の外来語アクセント規則について概観する。

日本語の外来語アクセント規則としては、モーラを基準とした (4) のいわゆる-3規則 (antepenultimate rule) がよく知られている。この規則で (5a) に挙げる語はすべて説明が可能であるが、一方で (5b) のように、この規則で説明のできない語も少なくない。

(4) 外来語アクセント規則 (McCawley 1968)

語末から3つ目のモーラを含む音節にアクセントを置く。

- (5) a. クリス'マス, ワシ'ントン, カレ'ンダー, ビスケ'ット, ト'マト
b. ア'マゾン, ミュ'ージシャン, シ'ンフォニー, カ'ーディガン

これに対し、Kubozono (1996) や Katayama (1998) は、モーラを基準としたアクセント規則では説明できない (5b) のような語の多くが語末に「軽音節+重音節 (-LH)」という構造を共通して持っている事を示し、音節量に基づく (6) の規則を提案した。

(6) 外来語アクセント規則 (Kubozono 1996, Katayama 1998)

後ろから2音節目が重音節の場合はその音節にアクセントを置き、
軽音節の場合はもう一つ前の音節にアクセントを置く。

(6) の規則を用いることで、(5) の外来語をすべて説明することが可能となる。またこの規則はラテン語のアクセント規則として知られるものと同じであり、ラテン語だけでなく様々な言語のアクセントがこの規則で説明される (Hayes 1995)。日本語における説明力の強さという面でも、また通言語的な一般性という観点から見ても、日本語外来語のアクセント規則としては (6) の規則がより適当であると考えられることができる。

これらの規則の他にも、「外来語のアクセントは原語のアクセント位置を継承したものである」という説があるが、田中 (2008) は量的な調査の結果から (6) の規則が最も効率的に外来語のアクセント位置を予測できることを示した。このことから、本稿における調査では (6) の規則を日本語における外来語のデフォルトアクセント規則として用いることにする。

日本語の外来語アクセント規則として (6) が最も高い説明力を有することを踏まえた上で、外来語アクセントと接尾辞に関する先行研究について議論する。先にも述べたとおり、外来語は基本的には分解できないユニットとして借用される。もしも借用によって語の内部構造が失われるならば、それらが音韻に影響を与えることは考えがたい。しかしながら、実際にはいくつかの先行研究で、日本語の外来語において原語の接尾辞がアクセントに影響を与えることが指摘されている。

例えば佐藤 (1989b) は、原語における接辞部分が、それぞれ外来語に対する一定のアクセント属性を有しており、接辞を持つ外来語では、その属性によってアクセントが決定されると主張した。具体的には、接辞部分を複合語の後部要素のように解釈し、その属性によって語全体のアクセント型が決められるとした。(7) に、佐藤 (1989b) の示したアクセント属性と接尾辞の例をいくつか挙げる (‘はアクセント核の位置を示す。接尾辞の例はすべて佐藤 (1989b) に挙げられているもの。語例は筆者の追加したものも含む)。

(7) a. 接辞部分の第一音節にアクセントを置くもの [先頭アクセント]

-ic: アカデミ’ック, クラシ’ック, ファンタスティ’ック, メタリ’ック

-ship: インターンシ’ップ, フレンドシ’ップ, リーダーシ’ップ, スポーツマンシ’ップ

b. 接辞の直前の音節にアクセントを置くもの [preaccenting]

-ity: アクセンビ’リティー, オーソ’リティー, セキュ’リティー, ヒューマ’ニティー

-tion: コンディ’ション, ステ’ーション, トラディ’ション, レクリエ’ーション

c. 先行部分のアクセントに影響を及ぼさないもの [無アクセント]

-let: ア’ンクレット, パ’ンフレット, リ’ーフレット

-ant: アシ’スタント, イ’ンスタント, コンサル’タント, プロテ’スタント

また、さらに佐藤 (2002) は接尾辞を持たない5モーラ以上の外来語についても、擬似的な形態素境界が生じていると考えることで外来語のアクセントが複合語アクセント規則によって説明できると主張した。これは、外来語においても形態構造がアクセントに影響するこ

とを指摘したという点で興味深い研究であるが、擬似的な境界の生じる位置がどのように予測されるのか、また先述のアクセント規則との関わりについては不明な点も多い。

Nagatomi (2019) は、こうした接尾辞ごとのアクセントの違いに対して、外来語アクセント規則 (上述の (6) の規則) と原語アクセント位置の継承という2つの軸をベースとした分析を行った。その結果、先行研究と同様、接尾辞ごとにアクセントには偏りがあることが確認された。またこれに加え、一貫して高い割合でアクセント規則に従う接尾辞がある一方、アクセント規則を無視して原語のアクセント位置にアクセントを置くような接尾辞も存在することを示した。³ (8) にNagatomi (2019) で示された接尾辞を、a. アクセント規則に従う (かつ原語アクセントには従わない) もの、b. 原語アクセントに従う (かつアクセント規則には従わない) ものに分けてそれぞれ挙げる。また、それらの接尾辞を持つ語についても併せて例を示す。

(8) a. アクセント規則に従う (かつ原語アクセントには従わない) もの

接尾辞: *-ate* (*adj, v*), *-er/-or*, *-ism*, *-ist*, *-ite* など

語例: イルミネ'ート、アナウ'ンサー、アナーキ'ズム、ギタリ'スト、アンモナ'イト

b. 原語アクセントに従う (かつアクセント規則には従わない) もの

接尾辞: *-al*, *-ant/-ent*, *-ary*, *-ion/-ation*, *-ive/-ative* など

語例: トラディ'ショナル、エ'レガント、コンディ'ション、アトラ'クティブ

前節で挙げたように、いくつかの接尾辞は新語形成にも用いられうる要素として日本語に借用されていると思われる。また、日本語によく馴染んだ外来語は平板型で発音されやすいという記述がなされることもある (秋永 1981) など、馴染み度とアクセントには関わりがあると考えられる。さらに、ここで見た外来語における原語の接尾辞の振る舞いは、Tanaka (2011) で示された、新語形成に用いられる接尾辞とアクセントの関係を思わせる。新語形成に用いられる接尾辞と、英語由来の外来語に見られる接尾辞とで、アクセントの振る舞いに特徴は見られないだろうか。

本稿では、上記を念頭に置き、日本語の新語形成に用いられるいくつかの接尾辞について、これらの接尾辞を持つ外来語の、アクセント規則での説明率に関して調査を実施した。その結果として、造語力の高い接尾辞を持つ外来語は、外来語全体もしくは造語力のない接尾辞と比較してより強くアクセント規則に従うということを指摘する。なお、米川 (1989) は新語形成の方法の1つとして「借用」を挙げており、外国語から借用された語もすべて新語と捉えている。しかし、外来語を新語に含めると表現が複雑になるため、本稿では「新語」を (2) や (3) のように日本語の中で造語されたものに対してのみ用いることとする。

2. 新語形成に用いられる接尾辞

新語形成と接尾辞について述べた先行研究はいくつかあるが、Irwin (2011) や1.1節に挙げた米川 (1989, 1992) は、いずれも造語に用いられることのある接尾辞を複数挙げている。また石野 (1992) も、英語の接尾辞を用いて作られた新語をいくつか例示している。ただし、これらの接尾辞の選定基準はいずれも示されておらず、中には英語にも存在する語も挙げられている。また、米川 (1992) に「英語からの接尾辞『チック』は造語力があるが、『フル』や『レス』はそれほどでもない」とあるように、それぞれの接尾辞の造語力には偏りがあると思われる。そこで、本稿ではIrwin (2011)、米川 (1989, 1992)、石野 (1992) の4つの先行研究のうち2つ以上に挙げられている接尾辞を造語力のある接尾辞と考えることとして議論を進める。(9) に、Irwin (2011)、米川 (1989, 1992)、石野 (1992) の4つの先行研究のうち2つ以上に挙げられている接尾辞6つと、その接尾辞を持つ語例を2語ずつ挙げる。また、それぞれ語例のあとにその接尾辞が挙げられている文献を示す。

(9) -er:	アルバイター、シキラー	(石野 1992, 米川 1992, Irwin 2011)
-ic:	漫画チック、かっぺチック	(石野 1992, 米川 1992, Irwin 2011)
-ism:	がんばリズム、おしゃれイズム	(米川 1989, 石野 1992, Irwin 2011)
-ist:	にやリスト、ダラリスト	(米川 1989, 石野 1992)
-ship:	スキンシップ	(石野 1992, Irwin 2011)
-ful:	ハートフル、羞恥フル	(米川 1992, Irwin 2011)

-shipについては、今回の調査対象には含めたものの、石野 (1992) とIrwin (2011) のどちらにおいても「スキンシップ」が一例挙げられているのみであった。その他の接尾辞は、外来語だけでなく和語や漢語とも結合して語形成に用いられている。これらの造語力を持つ接尾辞は、いわば語種の枠を超えた語形成ができるほど日本語に深く馴染んだ接尾辞であると考えることができる。なおこの他にも石野 (1992) は「キャッシング」という例を挙げており、-イングについては桑本 (2010) にも議論があるが、キャッシングは通常の借用語と考えることもできること、また桑本 (2010) がこの語尾形を持つ若者ことば (ウンチング (スタイル)、まいっチング、だいじょうピング) について「現在は皆無に等し」と述べていることから、ここでは造語力のあるものではないと考える。

以下、本稿では (9) に挙げた接尾辞を「日本語の新語形成において造語力を持つ接尾辞」と認め、これらの接尾辞を対象としたアクセント調査の結果を示した上で、(9) のような接尾辞を持つ外来語が外来語全体で見た場合よりもさらに高い割合でアクセント規則に従うことを指摘する。

3. 造語力のある接尾辞とアクセント

3.1. アクセント調査

NHK放送文化研究所 (編)『日本語発音アクセント新辞典』(2016) から、(9) に挙げた6種の接尾辞を持つ外来語を計366語抽出した。内訳は、*-er*: 218語、*-ic*: 51語、*-ism*: 49語、*-ist*: 41語、*-ship*: 4語、*-ful*: 3語である。複合語は除外している。なお、重音節を形成する二重母音は /ai/ のみとし、LH(軽音節+重音節) の音節構造を持つ3モーラ語で語頭にアクセントを持つものは、アクセント規則に従うものとしてカウントした。

また、上記6種以外の接尾辞を持つ語や、外来語全体で見た場合のアクセント規則での説明率を比較対象とするため、同じ『日本語発音アクセント新辞典』(2016) から、地名や複合語を除く3モーラ以上の外来語全体 (計4190語。(9) の接尾辞を持つ語も含む) についても同様に調査を行った。

3.2. 調査結果

前述の366語を接尾辞ごとに分けた上で、アクセント規則での説明力を示したのが表1である。それぞれの接尾辞を持つ外来語の例を (10) に示す。

表1: 造語力のある接尾辞を持つ外来語とアクセント規則での説明率

接尾辞	-er	-ic	-ism	-ist	-ship	-ful	計
語数	218	51	49	41	4	3	366
ア規則に従う	179	38	49	39	4	0	309
語数 (%)	(82%)	(75%)	(100%)	(95%)	(100%)	(0%)	(84%)
[参考] (4) に従う	140	38	49	39	4	0	270
語数 (%)	(64%)	(75%)	(100%)	(95%)	(100%)	(0%)	(74%)

- (10) *-er*: アナウ'ンサー、キャ'ッチャー、タ'ンブラー、プレ'ーヤー
-ic: アカデミ'ック、クラシ'ック、ダイナミ'ック、ドラマチ'ック
-ism: アカデミ'ズム、ジャーナリ'ズム、テロリ'ズム、メカニ'ズム
-ist: アナーキ'スト、タイピ'スト、バイオリ'ニスト、リアリ'スト
-ship: インターンシ'ップ、ショーマンシ'ップ、スポーツマンシ'ップ、リーダーシ'ップ
-ful: カ'ラフル、パ'ワフル、ビュー'ティフル

-ship、*-ful*についてはそもそもこれらの接尾辞を持つ外来語の数が少ないものの、*-ful*を除けばどれも高い割合でアクセント規則に従っており、合計では309/366語 (84%) がアクセント規則に従う。先述の、今回比較対象として実施した外来語全体を対象とした調査では、アク

セント規則での説明率は69% (2895/4190語) であり、造語力のある接尾辞を持つ外来語は外来語全体よりも15%ほど高い割合でアクセント規則に従っていることが明らかになった。

また、これらの数字は平板型を含めた結果である。平板型を除くと、これらの接尾辞を持つ語のうちアクセント規則に従う語は309/332語 (93%) となり、同じく平板型を除いた場合の外来語全体でのアクセント規則での説明率81% (2895/3569語) と比較しても12%ほど高い。

なお、今回の調査においては外来語アクセント規則として (6) を採用したが、表には参考として (4) の-3規則での説明力も示した。2つの規則が異なるアクセント位置を予測するのは語末2音節が-LH# (軽音節+重音節) の連続となる場合のみであるため (田中 2008, Kubozono 2015)、表1において違いが現れうるのは-*er*の場合となる。例えば (10) の「タ’ンブラー」という例は、-3規則では誤った位置にアクセントが予測される。今回の調査の結果においても、田中 (2008) の調査結果と同様に (6) の優位性が示された。

さらに、これら6種の接尾辞に関する結果をそれ以外の接尾辞と比較するとどうであろうか。佐藤 (1989b) には英語由来の外来語に見られる接尾辞が15種例示されている。このうち4種 (-*ism*, -*ic*, -*ship*, -*ful*) は表1に含まれ、残りの11種のうち2種 (-*ese*, -*like*) については該当する語が辞書に含まなかったため、これら6種を除いた9種の接尾辞を持つ外来語のアクセント規則での説明率を表2に示す。また、(11) に表2の接尾辞を持つ外来語の例を示す。

表2: 造語力のない接尾辞を持つ外来語とアクセント規則での説明率

接尾辞	-ant	-ence	-esque	-in	-ing	-ity	-let	-ment	-tion ⁴	計
語数	11	9	5	24	140	20	4	19	96	328
ア規則に従う	0	0	5	9	1	20	1	0	91	127
語数 (%)	(0%)	(0%)	(100%)	(38%)	(1%)	(100%)	(25%)	(0%)	(95%)	(39%)
[参考] (4) に従う	0	0	5	6	1	0	1	0	75	88
語数 (%)	(0%)	(0%)	(100%)	(25%)	(1%)	(0%)	(25%)	(0%)	(78%)	(27%)

- (11) -ant: アシ’スタント、イ’ンスタント、コンサ’ルタント、プロテ’スタント
 -ence: インテ’リジェンス、オ’ーディエンス、セ’ンテンス、ラ’イセンス
 -esque: アラベ’スク、グロテ’スク、バーレ’スク、ロマネ’スク
 -in: アスピリン⁰、インシュリン⁰、タ’ンニン、ペニシリン⁰
 -ing: ウォ’ッチング、カウ’ンセリング⁰、チュ’ーニング⁰、レコー’ディング⁰
 -ity: アクセシビ’リティー、オリジナ’リティー、クオ’リティー、リア’リティー
 -let: アウトレ’ット、ア’ンクレット、パ’ンプレット、リー’フレット
 -ment: アナウ’ンスメント、コミ’ットメント、サ’プリメント、マネ’ージメント
 -tion: アニメ’ーション、オ’ーディション、セレ’クション、リア’クション

表1の接尾辞が*-ful*を除けばすべて高い割合でアクセント規則に従っているのに対し、表2の接尾辞の中には、アクセント規則に強く従う接尾辞もあれば、そうではなく、むしろアクセント規則に全く従わないような振る舞いを見せた接尾辞もあった。接尾辞ごとの語数に偏りがあるため比較しづらいが、表1と2の結果を図にすると下図のようになる。

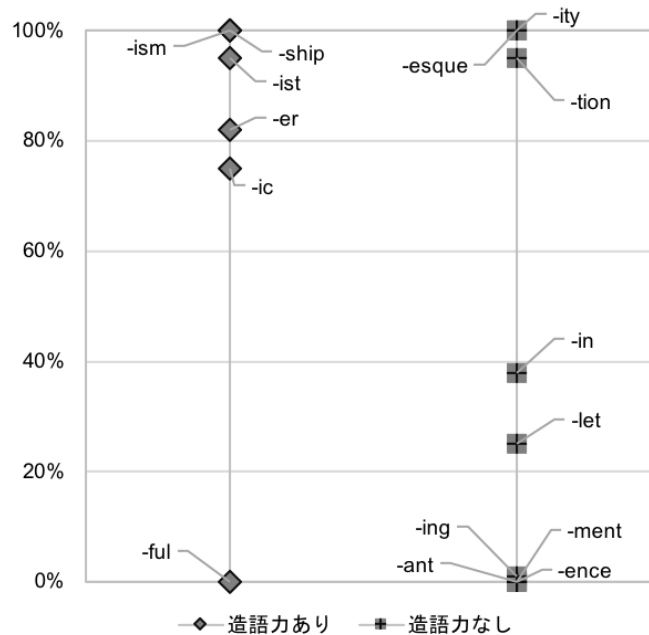


図: 接尾辞の造語力とアクセント

*-ful*のみが例外的であるが、これを除けば造語力のある接尾辞は上部に偏っているのに対し、そうでない接尾辞は説明率の高いものから低いものまで広く分布している事がわかる。⁵

ここまで見てきたとおり、造語力のある接尾辞を持つ外来語は、*-ful*を持つものを除き、外来語全体で見た場合よりも高い割合で一貫して外来語アクセント規則に従うことが明らかになった。

4. 接尾辞ごとの結果と考察

調査の結果を踏まえ、似たような特徴が見られた接尾辞ごとに3つの節に分けて議論する。具体的には、まず語数も多く80%前後の割合でアクセント規則に従っていた*-er*と*-ic*、次にほぼ100%に近い割合で規則に従う振る舞いを見せた*-ism*、*-ist*、最後に所属語数の少なかった*-ship*と*-ful*の順に、考察を述べる。

4.1. *-er*、*-ic*の造語力とアクセント

まず、80%前後の割合でアクセント規則に従っていた*-er*と*-ic*について考察する。*-er*は英語でも非常によく用いられる接尾辞で、日本語での造語力もかなり高いと思われる。Irwin

(2011) でも述べられているとおり-ラーという形で用いられることが多く、俗語や新語を多数掲載しているウェブサイト『日本語俗語辞書』にはこの接尾辞を用いた新語が約30語掲載されていた。また-icについては、表1を見るとアクセント規則での説明率は75%と、-erや-ism, -istと比較すると少し低い。しかしながら、やはりこの接尾辞を用いて作られた語も少なくなく、-erと同様に造語力は高い。村中 (2012) は接尾辞「-チック (-tic)」の造語力について『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』を用いて調査を行い、異なり数66の語 (句が前接したものも含めると68例) に-チック (-tic) が用いられていたと報告している。(12) に『日本語俗語辞書』から-er, -icを用いた語の例を挙げる。

(12) アムラー、シャネラー、マヨラー、チャリンカー、乙女チック、メルヘンチック

米川 (1992) は-erについて、造語成分として使われるとはしつつも造語力のあるものではないと述べているが、2020年の現在でも使用されるところを見ると十分な造語力を持つようになったと言えるのではないだろうか。

また、本稿で問題としているのはこれらの接尾辞を持つ外来語のアクセントであるが、これらの接尾辞を用いて作られた新語のアクセントについて、特に-erを持つ語の多くは平板型で発音されると思われる (Tanaka 2011)。同じ語尾形を持っていても外来語の場合は多くの場合アクセントを持つのに対し、新語の場合は無核になるという非対称性が観察されるという点で興味深いが、これがどのような理由によるものなのかについては議論の余地がある。⁶

4.2. -ism, -istの造語力とアクセント

-ism, -istは造語力が非常に高く、またこれらの接尾辞を持つ外来語はほぼ100%の割合で外来語アクセント規則に従う位置にアクセントを持つ。-ism, -istを用いた新語の例を (13) に示す。

(13) がっちりズム、がんばりズム、ちゃっかりズム、はったりスト、タンキスト

(13) の例はいずれも『日本国語大辞典 第二版』に掲載されているものである。『日本国語大辞典 第二版』にはアクセントの情報も記載されており、(13) に挙げた例も-ism, -istを持つ外来語 (10) と同じくアクセント規則に従う位置にアクセントが置かれていた。この点で、新語と外来語で振る舞いの異なる-erと非対称的である。また、(13) に挙げた例の語形成について見ると、「短歌/啖呵 + -ist」の造語であるタンキストは、語基の末尾の母音を削除して接辞が付加されている。もしも「短歌/啖呵 + -ist」でタンカリストとなった場合はイスト部分が接尾辞というよりも複合語の後部要素的だという解釈が成立しうるが、タンキ

ストに関しては語基と融合しているという点でより接辞的であると考えることができるのではないだろうか。

4.3. -ship, -fulの造語力とアクセント

最後に、語数が極端に少なかった-shipと-fulについて述べる。先にも記したとおり、-ship, -fulを持つ外来語の数は少なかったものの、-shipについては他の造語力のある接尾辞同様アクセント規則に従う振る舞いを見せる。この点、-fulについては例外と言わざるを得ない。ただし、-ship, -fulについてはこの2つの接尾辞を用いて作られた新語もあまり多くない。-shipはいずれの文献においても「スキンシップ」の一例しか挙げられておらず、語種を超えて語形成した例は見られない。-fulについても、(9) に挙げた「ハートフル」「羞恥フル」のみが例示されており、語種を超えて語形成していたのは「羞恥フル」の1語のみである。

また、英語の接尾辞-fulは *Shorter Oxford English Dictionary (Sixth Edition)* によるとともに形容詞fullから形成された接尾辞とされている。日本語においても「フル」は語としても借用されており、同音で意味も近い「語」が存在するという点で他の接尾辞とはすこし異なった特徴を持つ。-fulについては、語としても用いられうるという独立性の高さがアクセントに影響している可能性がある。⁷

5. 総合的な考察とまとめ

以上、日本語で新語を形成する際に用いられる英語由来接尾辞について、造語力のある(9)のような接尾辞を持つ外来語と、外来語全体や造語力のない接尾辞を持つ語のアクセント規則での説明率についてそれぞれ調査を行い、前者のほうが後者よりも強くアクセント規則に従うという調査結果を得た。

(10)、(11) に例を挙げたように、実に多くの接尾辞を含んだ語が日本語に借用されている。しかしながら、接尾辞そのものとして新語形成に用いられるのは(9)のようなごく一部の接尾辞のみであり、多くの接尾辞は単に外来語の一部として認識されるにとどまる。一部の接尾辞が造語に用いられうるということが何を意味するかについて考えると、それらの接尾辞は外来語由来の語基のみならず和語や漢語など、語種を限定せずに語形成が可能であるという点から、日本語の語彙の中に深く入り込んでいると解釈することができる。これを、外来語の語末に多く見られる音形のうち特に日本語に馴染んだものがより強く日本語のアクセント規則に従っていると捉えると、本稿で見た調査結果を説明することができるのではないだろうか。つまり、一部の(9)のような接尾辞を持つ外来語が外来語全体よりも日本語の外来語アクセント規則に従いやすいのは、それらの接尾辞が日本語内で語種の隔たりなく語形成に使用されるほどに日本語化しているからであると分析することができるのである。反対に表2に挙げたような、あまり造語に用いられない接尾辞を持つ語のアクセントに対する振る舞いが一貫しないのは、もちろん外来語アクセント規則に従う場合も

あれば、何らかの理由で別の原理に従ってアクセント位置が決定される場合もあるからであると考えることができる。

日本語の語形成とアクセントについて考える上で、特定の形態素とアクセント型との間に見られる結びつきを無視することはできない (佐藤 1989a, Zamma 2003など)。これまで様々な先行研究で在来語の形態素とアクセントについての考察がなされているが、本稿では新語の形成に用いられる英語由来接尾辞を対象として分析を行うことで、形態素とアクセントというテーマに新たな知見を提供することを試みた。接尾辞の造語力がその接尾辞を持つ外来語のアクセントと関係していることが明らかになったが、さらに検討の必要な問題も少なくない。今後の研究課題としてはまず、外来語のみならず新語のアクセントがどのように決められているのかを明らかにすることがある。*-ism*や*-ist*の場合はデフォルト位置にアクセントが置かれることを指摘したが、4.1節にも述べたとおり、*-er*を用いて作られた新語は平板型で発音されるという特徴を持つ。また、*-er*を持つ外来語についても、今回の調査結果では、表1に示したとおりアクセント規則に従う型が優勢であった。しかしながら、ファインダーやリポーターなど、平板型の語も34/218語観察された (他の5種の接尾辞を持つ外来語には平板型は見られなかった)。またこの*-er*の接尾辞を持つ語の興味深い点として、意味によって平板型と有核型のアクセントを持つペアが複数見られる点がある。たとえば、運転手の意味の「ドラ'イバー」とネジ回しの意味の「ドライバ⁰」や、保護具の意味の「サポ'ーター」とファンの意味の「サポーター⁰」など、あるときはアクセントを持ち、あるときは平板型で発音されるといった語のペアが見られる。日本語には例えば「平板式」の式と「卒業式」の式のように同じ形でアクセントの異なるペアとなる形態素が存在するが、これについて三宅 (2011) は、この形態素が接辞的用法で用いられていれば平板型に、語基的用法で用いられていれば通常のアクセントになるという分析を示している。*-er*については少なくとも語基的に用いることは不可能であるため、三宅 (2011) の分析のみでアクセントの違いを完全に捉えることは難しいが、語幹部分の意味や馴染み度など、他の観点から語種の違いを超えた一般化について検討することが、今後の課題である。

註

- ¹ 本稿は著者の修士論文、またNagatomi & Tanaka (2018) の主張を基として、調査方法を変更し修正を行った上で、新たな考察を加えたものである。本稿を執筆するにあたり、田中真一先生から多くのコメントを頂いた。ここに記して感謝申し上げる。
- ² 本稿で扱う日本語における借用された接尾辞と比較すると、日本語の-イズムや-イストのような接尾辞は、4.2節にも述べる通り母音の削除などを起こして語基と融合することがあるが、語基の語種は問わないという点で、インドネシア語の2種類の造語要素とはまた異なった性質を持つといえる。
- ³ Nagatomi (2019) ではさらに、全体としては原語のアクセントに従うグループの接尾辞を持つにも関わらず、原語のアクセント位置と異なる位置にアクセントを置き、アクセント規則にも従わない語が

少数ではあるものの存在したことから、この「原語アクセントと一致する」グループの語についても挿入母音音節に着目して例外的な分析を与えることでアクセント規則での説明を試みた。

- ⁴ -ion、-ationも含む。
- ⁵ 先にも述べたとおり、本稿では-イング (-ing) を造語力のある接尾辞には含めていない。しかし、もし-ingを造語力ありとする場合、-fulと同じくアクセント規則に従わない例外と認めざるを得ない。ただし、-fulや-ing、また註8に述べる-lessのアクセント規則での説明率はどれも0%に近く、極端に低い。このことから、それぞれアクセント規則以外の何か別の要因によって例外的な振る舞いを見せている可能性がある。
- ⁶ Tanaka (2011) には、-er (-ラー) を持つ新語は4モーラ型が基本であるという指摘がある。また加えて、4モーラかつ長母音で終わる外来語には平板型のものがほとんどないが、意味によっては平板型が表れうることも指摘している。
- ⁷ 2節のはじめでも述べたとおり、本稿ではIrwin(2011)、米川 (1989, 1992)、石野 (1992) の4つの先行研究のうち2つ以上に挙げられている接尾辞を造語力のある接尾辞として認め、調査を行った。本稿では分析の対象に含めなかったが、このうち米川 (1992) には「造語力はそれほどでもない」としつつ、-レス (-less) という接尾辞が挙げられている。この-レスを持つ外来語も、-フル (-ful) を持つ外来語と同じくアクセント規則での説明率が低いという特徴がある。これも、「レス」が語としての形も持つことと関係すると考えることができるが、これについてはさらなる検討が必要である。

参考文献

- 秋永一枝. 1981. 「アクセント習得法則」『明解日本語アクセント辞典 第2版』東京: 三省堂.
- 石野博史. 1992. 「外来語の造語力」『日本語学』11(5), 42–49.
- 窪菌晴夫. 2002. 『新語はこうして作られる』東京: 岩波書店.
- 桑本裕二. 2010. 『若者ことば 不思議のヒミツ』秋田: 秋田魁新報社.
- 佐藤大和. 1989a. 「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」『日本語の音声・音韻 (上)』(講座日本語と日本語教育 2) 233–265. 東京: 明治書院.
- 佐藤大和. 1989b. 「外来語アクセントの分析と規則化」『日本音響学会講演論文集』133–134.
- 佐藤大和. 2002. 「外来語における音節複合への区分化とアクセント」『音声研究』6(1), 67–78.
- 田中真一. 2008. 『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』東京: くろしお出版.
- 三宅知宏. 2011. 『日本語研究のインターフェイス』東京: くろしお出版.
- 村中淑子. 2012. 「接尾辞「チック」について – 「CD-毎日新聞」(1991-2005) およびBCCWJを用いて–」『桃山学院大学 国際文化論集 (45)』115-144.
- 米川明彦. 1989. 『新語と流行語』東京: 南雲堂.
- 米川明彦. 1992. 「新語と造語力」『日本語学』11(5), 50–57.

- Haspelmath, Martin. 2009. Lexical borrowing: Concepts and issues, In Haspelmath & Tadmor (eds.) *Loanwords in the World Languages: A Comparative Handbook*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hayes, Bruce. 1995. *Metrical Stress Theory: Principles and Case Studies*, Chicago: University of Chicago Press
- Irwin, Mark. 2011. *Loanwords in Japanese*, Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- Katayama, Motoko. 1998. *Optimality Theory and Japanese Loanword Phonology*, Doctoral dissertation, UC Santa Cruz.
- Kubozono, Haruo. 1996. Syllable and Accent in Japanese: Evidence from Loanword Accentuation, *The Bulletin (Phonetic Society of Japan)* 211, 71-82.
- Kubozono, Haruo. 2015. Loanword phonology, In Haruo Kubozono (ed.) *The handbook of Japanese phonetics and phonology*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- McCawley, J.D. 1968. *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*, The Hague: Mouton.
- Nagatomi, Hiroaki. 2019. Suffixes and Accentuation of English Loanwords in Japanese, *KLS Selected Papers* 1, 99–110.
- Nagatomi, Hiroaki & Shin'ichi Tanaka. 2018. Word formation and accentuation of English suffixes in Japanese. Paper presented at 5th NINJAL ICPP, 27 October 2018.
- Tanaka, Shin'ichi. 2011. Phonological and Morphological Structure of New Words. Paper presented at CELIJA, 7 May 2011.
- Tadmor, Uri. 2009. Loanwords in Indonesian, In Haspelmath & Tadmor (eds.) *Loanwords in the World Languages: A Comparative Handbook*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Zamma, Hideki. 2003. Suffixes and stress/accent assignment in English and Japanese: A Survey, In Takeru Homma et al. (eds.) *A New Century of Phonology and Phonological Theory*, Tokyo: Kaitakusha.

辞書・データベース資料

- NHK放送文化研究所・編. 2016. 『NHK日本語発音アクセント新辞典』 東京: NHK出版.
- 日本語俗語辞書 (<http://zokugo-dict.com/>) [2019/10/12アクセス].
- 『日本国語大辞典 第二版』 2000. 東京: 小学館.
- Shorter Oxford English Dictionary*, Sixth Edition, [Mac application version 3.80]. 2007. Oxford: Oxford University Press.